

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	師田 史子
論文題目	フィリピンにおける賭博の民族誌的研究 —不確実な事象への没頭を通じた現実性の構築—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、フィリピン社会における賭博実践に焦点をあて、「賭ける」ことの意味を考察する。これまでの賭博に関する学術的な論考は、その多くが、賭博が社会悪であるというアприオリな断定に終始する傾向がみられた。本論文ではそれに代えて、偶然性やリスク、予測不可能性それ自体を娯楽の対象とする賭博の実践を、人々が不確実性に対処するための技法という視点からとらえ直すことを試みる。</p> <p>第一章では、フィリピンにおける賭博の政治的・社会的位置づけの変遷を素描する。植民地期から独立後の現代にいたるまで、フィリピンでは賭博の管理が大きな政治的イシューとなってきた。賭博は人々を怠惰と浪費に導く社会悪であるとの前提から、歴代公権力は賭博の取り締まりを試み、その根絶が不可能な場合は、公営化や部分的合法化などの手段で国家機構への取り込みをはかってきた。このこと自体は世界で幅広く認められる事実であるが、国家権力の担い手から末端の賭博参加者に至るまで、賭博が社会のあらゆる層に深く埋め込まれていることがフィリピンの顕著な特徴として見いだされる。</p> <p>第二章では、賭博をめぐる道德観念について論じる。賭博を支える人々の価値づけを見ることで明らかになるのは、国家の定める賭博の合法性／違法性と、人々の抱く「逸脱した賭博」「悪しき賭博」といったイメージが一定のズレを含んでいるという事実である。フィリピンにおいても、賭博が無条件に人々の支持を得ているわけではなく、賭博耽溺者への批判は常に存在する。しかしそこでの善悪の基準というのは、法的な合法性ではなく、道義的妥当性の有無 (licit/ illicit) にしたがって価値づけられているのがその特徴である。</p> <p>第三章・第四章では、闘鶏の事例を取り上げる。第三章では、闘鶏産業を概観しながら、それが生業として成立しているメカニズムに着目する。そこからは、闘鶏に没頭する人々が賭博を生業として維持し続けることができている背後には、家族・友人など闘鶏に参加しない人々による日常的な不確実性への対処と、闘鶏家同士の緩く広い繋がりが働いていることが明らかになる。</p> <p>第四章では、闘鶏の現場において、不確実性がどのように扱われているのかを検討する。闘鶏においては、鶏の状態が勝敗を左右することから、そこに参加する人々は鶏に関する膨大な知識を蓄積しながら、最善と思われる賭けを行う。にもかかわらず、鶏の行動は完全な予測が困難であるため、不確実性の要素は常に残る。鶏に関する知識が膨大であるだけに、負けの要因として想定されるものもまた非常に多くな</p>			

り、このことが因果関係の推測自体を不成立にしてしまう。その局面で持ち出されるのが、不運という説明原理である。

第五章と第六章では、数字くじの事例を取り上げる。二桁の数字を当てるという数字くじは、当人の技量と無関係に当選確率が百分の一に固定されている、という意味で、「面白さ」を欠くとされるが、ならばなぜ人々は数字くじに熱中するのか。第五章での考察を通じ、当事者レベルでの語りに着目することで明らかになるのは、当選番号をさがすなかで、自分の暮らしの周囲にその予兆を見だしそれを意味づけていく、という「遊び変え」が、数字くじを人々にとって有意義なものにしているという事実である。

しかし、人々のそうした働きかけが、百分の一に固定された当選確率を高めるわけではない。ならば人々は確率論の誤謬に陥っているのだろうか。それを考察するのが第六章である。そこでは、賭けの当事者たちの行動が実際の当選確率を理解していないのではなく、現実の賭けの現場においては、自分が選んだ数字が当たるか外れるかの二者択一として争点が構成されるため、百分の一の当選確率が二分の一に収斂していくことが明らかになる。

結論では、鬪鶏と数字くじから浮かび上がってくる、不確実性への賭博者的な身構えについて考える。異なる事例から共通して見いだされるのは、あえて不確実性に自らを投企する人々の姿である。人々はよりよい結果を得るためにさまざまな変数を考量し、あらゆる手段を尽くした果てに、最後の瞬間にはあえて不確実性に身を委ねる判断を行う。この発見は、不確実性の根絶が不可能な現実のなかで、あえて不確実性自体を楽しみながら、自分の生活を有意義なものに作り替えていく人々の技法である。

(論文審査の結果の要旨)

人々は不確実性にいかに対処するのか。これは人間社会の歴史とともに古く、またリスク社会とも呼ばれる現代にも通底する、という意味で、文字通り古くて新しい問題である。本論文はこの問題に対し、老若男女を問わず愛好者が際立って多いフィリピンの賭博を事例に、民族誌的手法をもって取り組むことで、不確実性をめぐる議論に新たな光を当てるとともに、従来とは異なる視角からフィリピン社会論を構想する試みである。

本論文の学術的な意義は、以下の三点である。

その第一は、賭博者の世界を内在的に理解する民族誌的記述それ自体の価値である。これまで賭博の社会科学的分析においては、賭博というのは社会の落伍者が引き起こす社会病理現象として扱われる傾向にあり、賭博に関与する人々の内在的な世界は総じて見過ごされてきた。それに対し本論文では、賭けに関わり、積極的に投企してゆく者たちの精神世界を、直接的な語りの紹介と分析をとおして描き出し考察している。賭博への没頭という一見すると非合理的な思考と行為をめぐって、それに関わる当事者の意味づけを内在的に理解しようとする本論文の試みは、本人もが賭博に参加することを通じて初めて達成できたものであり、参与観察型民族誌による異文化理解の強みを改めて示してくれている。

本論文の第二の学術的意義として、不確実性に関する議論への貢献があげられる。近年のリスク社会論などの文脈では、不確実性というのは縮減（できれば消去）の対象として位置づけられる。実際にフィリピンの賭博者たちは、闘鶏であれ数字くじであれ、不確実性の縮減のためにあらゆる知識を動員する。にもかかわらず、人々は賭けの刹那においてその努力を放擲し、運命に身を委ねる選択を行う。しかしこれは単なる受け身の宿命論ではなく、それ自体がすぐれて能動的な行為なのであり、不確実性が決してゼロにならない世界の現実のもとでは、どこかで不確実性を受け入れ、不確実性そのものを楽しまねばならない局面が必ず生ずる。本論文の考察からは、不確実性の消去ではなく、逆に不確実性に能動的に身を委ねる技法こそが、賭博が人々の日常に交差し、人々を魅了する要素となっているという発見が導かれる。

第三に、本論文の民族誌が、賭博への着目からフィリピン社会論に新たな視角をもたらしている点があげられる。フィリピンにおける賭博の特徴は、国政エリートから末端の市井の人々に至るまで、社会のあらゆるレベルにそれが埋め込まれている点にある。国家レベルや地方政治レベルでは、賭博の違法化が為政者への贈賄の契機となり、その合法化が同じく為政者の利権をもたらすというように、賭博の善悪をめぐる問題は、常に具体的な政治力学と連動して展開されてきた。いっぽうで賭博は、法的な合法性ではなく道義的な正しさという、国家権力とは別次元の価値基準によって、市井の人々の社

会倫理のなかにも埋め込まれてきた。本論文は、従来のフィリピン社会論、フィリピン国家論が視野から遠ざけてきた賭博現象にあえて正面から取り組むことで、中央レベルでのマクロ政治史の論理と、それを末端で支える人々の価値観の（時にズレを含んだ）共鳴現象を明らかにし、マクロからミクロを貫くフィリピン社会の動態を描き出すことに成功している。

以上のように本論文は、参与観察にもとづく賭博の民族誌的研究という視点から、賭博者たちの動機づけの論理を内側から明らかにするとともに、それを通じて不確実性をめぐる議論への新たな問題提起を行い、さらにそれをフィリピン社会論、フィリピン国家論の文脈に位置づけるという試みであり、これら複数の分野のそれぞれに対して従来の視点の変更を迫る、きわめて優れた研究である。それは東南アジア地域研究や文化人類学的研究のみならず、リスクや不確実性をめぐる哲学的論考に対しても寄与するところが非常に大きい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和4年1月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。